

Title	James J. Gillespie: The Principles of Rational Industrial Management. London 1938.
Sub Title	
Author	小高, 泰雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.1 (1940. 1) ,p.131(131)- 133(133)
JaLC DOI	10.14991/001.19400101-0131
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400101-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

James J. Gillespie : The Principles of Rational Industrial
Management. London 1938.

小 高 泰 雄

従来米國に發展せる科學的經營法 (Scientific Management) に代つて、合理的經營法 (Rational Management) の妥當性を主張せんとするのが本書全卷を貫く著書の意圖である。従つて著書の力點は二つに分れてゐる。一は科學的管理法の缺陷の暴落であり、他は合理的管理法の積極的建設である。著書自身其の序に述ぶる如く、嘗ては科學的管理法の信奉者であり、心酔者であつた。併し、英國に於ける本法の適用の齎される幾多不成功の實例を見、更には又、ハーヴァート大學の Human Problem and Industrial Civilization の著者メイヨー教授 (E. Mayo) の思想に深く感動し、科學的經營法の基本原理に批判の眼を轉ずるに至つたものである。

企業は社會的特質を有する社會集團である。従つて、企業が他の社會集團と其の目的を異にしてゐるとしても、其の目的を合理的に到達せんとする經營法の研究の爲めには、社會集團及びこれを構成する個人的行動の諸科學的研究を無視することを許さない。著者は斯くして、個人行動關心の分析と社會集團行動の分析に染手したる後、個性と社會性の不可分の關係を證明し、所謂社會個性 (Socio-individuality) の觀念を確定する。彼の自己意識と義務

James J. Gillespie : The Principles of Rational Industrial Management. London 1938.

一三一

(一三一)

觀念の關聯は獨逸觀念論と其の軌を一にしてゐる。他面に於いて個人心理と團體心理の離隔を心理學的立場を參照して考察する。

科學的管理法の非科學性はまさに經營對象たる人の社會個性に對する無理解と、團體心理の無視に存する。彼の立場よりすれば、凡そ人間對象として適用せられる經營上の法則と自然科學の方法とは根本的に相容れない。少數の個人の經驗觀念より誘導せられ規範を團體的個人へ適用することは、機械觀的、或は單純なる衝動論的哲學觀と同様に一種の偏見である。テイラー學徒の誤謬を指摘する著者は、著者自からの行つた數次の經驗を基礎として英國に於ける其の失敗が全く彼上の方法的誤謬に立脚することを縷説してゐる。理想的、目的々、多樣的個人の發見を著しく強調してゐる著者は、團體非論理性を説けるホワイトヘッドの論旨に寧ろ多大の共感を示してゐる。併しながら、其の關心論の基柢に於いて、衝動論と理想論の折衷を飽くまで堅持しようとする著者の哲學は、個人の多數性のみに興味を集中する産業心理學に自からを投下することを許さない。經營の科學に對する態度は哲學的である。蓋し、それは一科學のグーテに對立する他の科學のそれを検討し、而して其の結果を全經營地位に關聯せしむるが爲めである。こゝに又彼の合理的管理法の積極的立場の開展を見ることが出来る。筆者は嘗て、經營學が實際科學として、他の諸科學の一定目的に對する統一であり、而もそれは人と人との關係を規定する法則なりと呼んだことは著者の思考と一致するものあるを覺ゆるのである。個體の發見と其の完成の上に完全なる經營形態を究めようとする著者の意圖は經營それ自體の社會的意義の自覺によつて、完全社會經營の法則を發展せしめてゐる。著者は經營の分析的分化と綜合的分化を個體の同一性と多様性とを根據として展開すると共に、他面、經濟的諸變動の分析を通して、個體經營の發展の、社會經濟的成果 (Socio-economic Effectiveness) の到達せらるゝことによつての

み保證せらるべきを主張してゐる。而して殊に配給、金融生産局面に於ける綜合的分化形態の完成は著者の殊に強調するところである。獨逸經營學に於いて述べられる經濟性概念がこれと同様に内面的完全と外面的完成への効果に其の基礎を究めつゝあることは疑ひ得られぬところであらう。著書の經營論上の指導者、規定、統制の諸問題の考察を何れも科學的經營法に於ける如く、單純なる能率の基柢の上ではなくして、以上の社會的規範の上に、社會學的、心理學的、生態學的省察を行つてゐる。

惟ふにかゝる經營法への發展は、ラートブルック、トエンニェス、ゴットルに見らるゝ如き、全體主義と個人主義との新たな調和形態の發見を究むる哲學觀と其の流れを等しくしてゐる様に考へられる。經營學者に嘗て、この點を強調したるものはニリリッシュに究め得られるかと思はれる。彼はその組織論に於いて經營者を中心として、其の自己意識の上に新たな經營形式の展開を行つてゐる。著書が、これを單なる經營者それ自體に止むることなく、廣く經營全體の意義を社會學的、心理的立場より反省し、新たな完成形態の構成を思考してゐることは英國流の經營學的著書として特異の而して教へらるゝところ多大なるものあるを感ずるのである。

—昭和十四年十二月廿三日—